



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

教会群の世界遺産化に思う

柴田 芳男

教区経済問題評議員

(一)

昨年一月、ユネスコの世界遺産暫定リストに、未来に残す人類の宝であり、人間の創造的才能を表わす傑作である世界遺産候補として「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が登録されました。日本では既に登録された京都・奈良の文化財を始め、世界遺産が14件あります。

登録を目指す動きが全国各地で50件以上あると聞いており、その中でも暫定リストに登録されているもの9件中には「長崎の教会群を世界遺産にする会」の多年にわた

る熱意と努力の賜であり、その労を多とするものであります。

ヨーロッパの時代と場所をふまえた、建築様式の粋を集めた絢爛豪華で、美術品の宝庫のような聖堂と比較して、長崎の教会堂は、和風の構造と洋風の装飾を兼ねた、西洋と日本の影響が合流した独創的なエキゾチックで先祖の汗がこもったものです。そしてそれらは意外に周囲の景観とマッチしており、国内では高い評価を受けてきました。

それでも国宝大浦天主堂以外は無理と思っただけに、暫定リスト

入りはとりわけ嬉しく感じました。勿論、建物の特異性がかりでなく、1550年のフランシスコ・ザビエルの来崎(平戸)から始まり、布教の浸透、禁教令による弾圧と殉教、潜伏、大浦天主堂の完成と信徒発見、明治政府の浦上信徒総流配すなわち「旅」で示された神への愛の強さが世界を動かしたとも言えます。その熱意に押されたかのように、諸外国の抗議が相次ぎ、1873年キリシタン禁制の高札が撤去されました。この約400年以上に及ぶ全世界に類をみない、長崎のカトリックの歴史が、併せ評価されたものと思います。

(二)

ユネスコの本登録に当たっての審査では、教会だけでなく、その周辺の集落や自然環境など景観まで含めた保存が必要です。そのために保護・保存管理計画の策定が義務づけられるため、行政では県民の啓発も目的とした推進機構が組織され、環境保全のプログラムづくりが始まっています。

昨年5月には、司教区においても、巡礼者の増加にそなえての情報発信とガイドの養成を目的とした「長崎巡

礼センター」を発足させました。10月には啓発及び周辺環境の整備保存に關する事業を行い、バランスの取れた「保存と活用」の実現に寄与することを目的としたNPO法人「世界遺産長崎チャーチトラスト」が発足し、ハードルは高いとは云いながら、本登録に至る準備が着々と行われるようになってきました。

(三)

しかし当事者である小教区においては、多少登録について温度差が感じられてなりません。それは尊厳性を出来るだけ維持しながら、教会群を観光の起爆剤にしようとしている行政や経済界の考え方と、あくまでも信仰を貫こうとの立場の違いから出ているものと思われれます。

確かに登録後、白川郷や白神山などでは、観光全国区となり観光客が増し、集落産業が根付くと共に、渋滞や周辺の自然破壊を引き起こしているとも指摘されています。しかも宗教施設にあつては、精謚が乱され、信仰がディスターブされる懸念が表明されております。

果たして観光と信仰は二律背反なものでしょうか。

当然世界平和に寄与するためです。

とくに文化遺産の場合、構成遺産としての建造物あるいは史跡のみならず、これらを巡って展開されてきた歴史（ストーリー）が重要視されるということです。

文化という言葉には、何かつかみどころのない感じがありますが、もともと「耕す」という意味があります。対象となる建物や史跡やその周辺を耕していくと、そこから人々の生活そのものが深く刻まれた歴史が浮かび上がってきます。

人々のよろこびと希望、苦しみと悲しみがこめられた、とうとい記念碑としての構成遺産の中で、特に世界の宝であると認められたとき、世界文化遺産化されることになります。

民族も風土も、価値観もちがう世界各地にある、こうした宝を味わうことによつて、違いを認めつつこれを評価し合うという、平和づくりに貢献していこうというわけです。これは普遍（違いつつ一つ）を意味する「カトリック」ともいうことばともびつたり一致します。

とくに長崎の教会群は、世界に類例を見ないほど、長い間の迫害に耐えてきた歴史を持っています。

その中で、基本的人権である信仰の自由、人間の尊厳を非暴力を持つて堂々と証してきました。

いまその先祖たちが、耐え難い困難の中で営々と築いてきたものを、世界の人々が宝とし

て認めつつあるということになります。

Q. 世界文化遺産になると観光客も増えるだろうし、人が多くなると、どんなにきれいごとを言っても、荒らされるようになることは避けられないと思うのですが……

A. アメリカの有名な黒人指導者であった故マルチン・ルーサー・キング牧師は言っています。

「世界に悪がはびこるのは悪人が多いからではない。ほんのひとにぎりの悪を行う者たちが熱心だからである」と。

多くの人々が教会を訪れるようになると、そのほとんどは善意の方々であっても、ほんのひとにぎりの心ない者が現れる恐れは出てきます。

それでも教会が「開かれる」ことを目指すかぎり、これは永遠のジレンマということになります。

ひとにぎりの人々のために世界への窓を閉ざすのか、それともそういうマイナス面を超えて社会及び世界との出会いに踏み込むのか、それこそ殉教の歴史にさかのぼり、かつ未来に目を向けつつ、責任ある判断を下すべき重大なことです。

きれいなことにこもることなく、とくに過疎地における建物維持など、お金の面も含めて考えを練り込んでいく必要があります。

Q. 教会がこの世に存在する唯一の理由は「遣わ

された者」のわざ、すなわち「宣教」であると聞いていますが、世界文化遺産化は宣教につながるのでしょうか。

A. まさに教会の存在理由は宣教にあります。パウロがコリントの教会への手紙で言っているように「福音のためなら何でもします」（9・23）というのが教会の基本姿勢です。

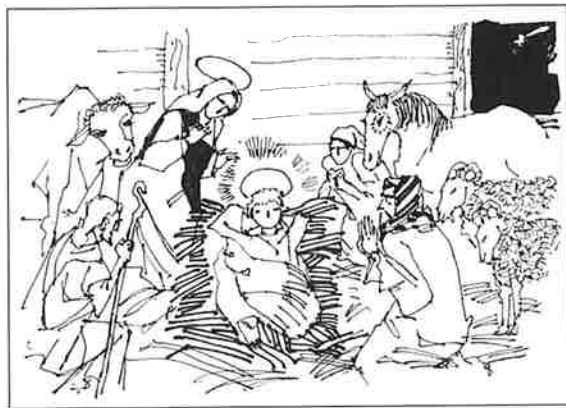
世界文化遺産化そのものは、洗礼に直結する直接宣教とはならないでしょうが、それを機会に人々が教会を訪れるということは、間接宣教のチャンスと受け止めるべきではないでしょうか。

本来教会に招かれている方々は、どちらかというところ訪れにくい傾向にある中で、神さまが別の方々を招きはじめられた、と考えるのは飛躍しすぎた考え方でしょうか。

神さまはすべての人の中に、ご自分のいのちの種を蒔かれており、教会を訪れる機会を通して、その種が発芽しないと、だれも断言できないことです。

つまり世界文化遺産化は、神さまに向かうための環境を整える、間接宣教のチャンスになり得るということです。

いずれにしても、宣教は基本的に神わざですから、たとえ表面的に愚かに見えることでも、必ずや神さまはそのことを通して、人々を招いておられるという信仰は、持ち続ける必要がありますでしょう。



「進行係」(参加者たちに質問する)

- ① イエスさまはどんな姿でこの世に来られましたか。
その意味は何でしょうか。
- ② クリスマスに関連した思い出を話してみましよう。

「見えない神の見える姿」(コロサイ1・15)であるキリストは私たちと同じ人間としてこの世に来られ、人間の手で働かれ、人間の知恵で考え、人間とひとつになられました。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(フィリピ269)

「参考聖書」

- * マタイ 2・1・12
東方の博士の訪問
- * ヨハネ 1・1・18
みことばが人となられた

C. さらに一歩進んで
旅をつづけよう

神さまが人間となり、私たちと共におられるようになった神祕の中で、私たちは神さまが人間とこの世をどれほど愛しているかを知ることができます。「暗闇に住む民は、大きな光を見る」(マタイ4・16)というみ言葉のように、私たちはキリストを通して、生命の光を受けました。それで私たち

はこの方を「道、真理、生命」(ヨハネ14・6)と告白します。

「進行係」(参加者たちに質問する)

- ① 「暗闇に光を見た」と言う体験がありますか。そのことによつてあなたの考え方、生き方は変わりましたか。
- ② あなたは愛のために、自分を無にして相手とひとつになりたいという衝動を覚えたことがありますか。

(さしつかえなければ一組対話をしたのち、全体の集いで発表する。)

「進行係」

自由な祈りをささげながら、集いを終わります。

「進行係りの心得」

愛する者は愛する相手と一つになろうとする。無限の隔たりのある神と人間の間をもともせず、人間となつたばかりか、ご自分を無とされた神。このどうにも止まらないほどほとぼしる神の愛の衝動を感じるよう導く。

「覚えましょう」

31. イエスはどこでお生まれになりましたか。
* イエスはイスラエルのベツレヘムでお生まれになりました。

ムでお生まれになりました。

32. イエスの誕生日は12月25日ですか。

* イエスがいつお生まれになったのか正確に知ることはできません。

12月25日は本来ローマ時代に「不滅の太陽誕生日」として祝われていた日でした。ローマ帝国がキリスト教を承認した313年以後、イエスさまを「正義の太陽」としてあがめ、その日をイエスさまの誕生日として記念するようになりました。

33. クリスマスの準備期間である待降節をどのように過ごさなければなりませんか。

* ゆるしの秘跡などを通して心を新たに、隣人愛を実践しながら、イエスを迎える準備をします。

34. イエスの称号にはどんなものがありますか。

* イエスを「キリスト」「主キリスト」「神の子」「神の子羊」「人の子」「み言葉」などいろいろな称号で呼びます。その称号にはそれぞれ深い意味が込められています。

パウロはコリントの第1の手紙の冒頭で記しています。「神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ」と。

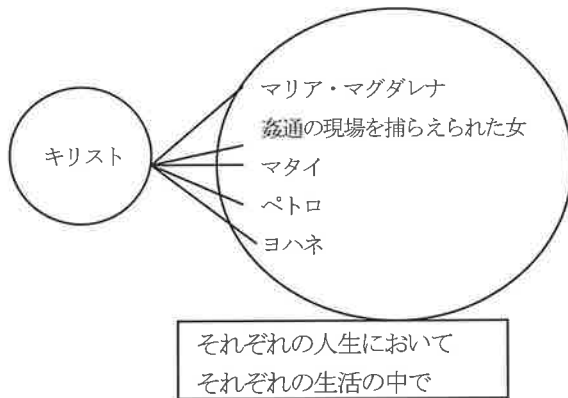
キリストに出会って聖とされた人たちが集まって教会共同体が誕生して、組織化されるに従って、教会共同体そのものから遣わされるという形が出てきます。そして派遣に対して組織としての教会共同体の論理が働くようになります。教会のありようによって派遣の目指すものや形が変わっていきます。

第1ステップの教会像

実人生の中で、キリストと直接出会った人々の集まりから、教会が始まります。姦通の現場で出会ったマリヤ・マグダレナ、徴税人マタイなどキリストに出会い希望を見出した人々です。

使徒言行録によると、聖霊降臨のあとペトロは四つの説教を試みています。それによると福音書と少し軸が移っていることがわかります。福

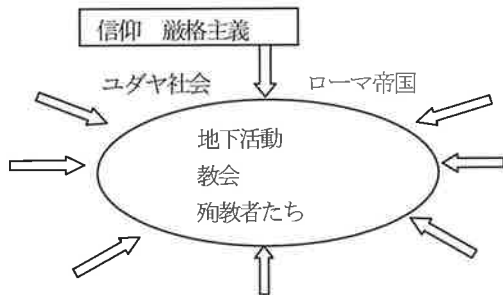
音書ではキリストと実人生の中で出会った人々が、その愛と優しさ・ゆるしに躍動する姿が中心ですが、使徒言行録ではキリストの奇跡などによる「真のメシアであるキリストの証」へと軸足が移っていくのです。言い換えると、「人間そのものへのまなざし」から「キリストがメシアであることの証し」を伝えるという側面が出てきているということなのです。



第2ステップの教会像

第2ステップはユダヤ社会とローマ帝国の弾圧に始まります。教会共同体は地下活動を余儀なくされていきます。

テルツリアナヌスの「殉教者の血が教会を育ててきた」という言葉に象徴されるような、厳格主義が現れてきます。例えば、一人の人が洗礼を受けます。洗礼を受けた後に大きな罪を犯して（例えば姦通、殺人、仲間割れ）あとで悔い改めて、再び仲間に入れてくれと言っても、入れてくれないということが起こります。さすがに教会は、それは間違いであるとして、厳格主義が忍び込んできたことは一つの変化です。



テップになると純粋な信仰・命をかけた信仰が強調されるようになります。これはローマ帝国の弾圧の中で信

第1ステップ

人間の強弱をはるかに超えた、神の恵みの自在な働きをみつめ、それに身を委ねることに、福音的信仰の本質があります。

私たちは、長い教会の歴史の中で、その時々強調される部分も同時に、遺伝子のように受け継いできており、これに、肝心の福音の本質を見失ってはならないと思います。

キリストとの出会いの本質は何か。この課題を持ち続けることは、とても大切なことだと思います。





ダバオの青年リーダー研修会にて・・・

2年間の海外研修期間を頂いて、アメリカとフィリピンに行ってきました。戸惑ってばかりでしたが、異文化に触れ多くの友を得たのは何よりの宝です。この機会を与えてくださった高見大司教様と教区の皆様に心から感謝しています。

研修期間の最後に、フィリピンのダバオ島に4日間滞在しました。小共同体の盛んな教区の一つ、聖ヨゼフ教会の様子を伺うためです。3000世帯以上の信者を抱え、46の巡回教会を持つこの小教区には3人の司祭しかいません。そこで、この小教区には各巡回教会で行われている小共同体活動を多方面からサポートする信徒が、一人専属として雇われています。ジーナさんという60代の元気な方で、朝から夜遅くまで小教区内を飛び回っていました。短い期間にすべてを見聞することは不可能でしたが、彼女のお陰でいくつかの小共同体の様子を伺うことができました。

一番心に残ったのは、青年たちのリーダー研修会でした。日曜日の午後から月曜日の午後まで美しい浜辺の側のキャンプ場へ船で出かけました。各巡回教会には16歳から24歳までの若者たちで構成されている青年会があり、その青年会で今年新しくリーダーとして選ばれた若者たちの集いでした。

33人の一行は午後4:30頃宿泊所に着きました。夕食後、一息入れてからミーティングが始まりました。セブンステップの要領で開催、聖書朗読がなされ、分かち合いは二人一組になって行われました。その後、青年たちは一人ずつリーダーとしての抱負を述べ合い、4班に別れて《今年自分たちがやりたいこと・できること。また青年会の弱さ・もろさについて》話し合いが始まりました。

夜10:30頃、「祈りの集い」がありました。一人ずつ名前が呼ばれ、呼ばれた人は宿泊所から浜辺に準備されたキャンプファイヤーの場所へ移動しました。途中、彼らは自分を最もよく表現するものを指定された場所に置き(携帯電話が多かった)、海水で手を洗ってしばらく銘々沈黙の祈りを捧げ、薪の周りに集合しました。全員が集まると、薪に

火が灯され、聖書・十字架・幼子イエスを手にした3人の青年会役員が自作の祈りを捧げ、沈黙のうちに各自が一日をふり返りました。30分程ゲームをして楽しんだ後も青年たちは話し合いのまとめをしたり、銘々短い期間にすべてを見聞することは不可能でしたが、いくつかの小共同体の様子を伺うことができました。明け方まで語り合っていました。

翌日は早朝から海水浴を楽しみ、朝食後各グループの発表が始まりました。そして、その中から今年の活動計画を作り上げていく作業が昼食を挟んで最後まで行われました。私は他の予定のため、昼食後彼らと別れました。

生き生きとした彼らの姿を眺めながら、何とも言えない若者のパワーを感じ、頼もしく思いました。一方、担当司祭は食事の世話をし、遠巻きに青年たちを見守っているだけでした。ジーナさんが研修会の全体をとりまとめましたが、もっとも大事な話し合いや祈りの集いでは、青年会事務局の青年たちがニューリーダーたちをリードしていました。

ジーナさんは私に言いました。『私と神父様がすべてを決めるならこの話し合いは2時間もあれば十分でしょう。でもそれではだめなのです。小共同体を作り、育てる上で最も大切なことは、集まった仲間たちが互いに心をつつしなが、自分たちで何ができるか相談し、できることから始めていくことです。良いものは次に引き継がれ、そうでないものは今年限りです。失敗も大きな実りの一つなのです。私たちは小共同体をここまで作り上げるのに40年かかりました。小共同体はそのメンバー一人ひとりの中にある神の賜物をくみ取って、それをその共同体のメンバー達が生きることには意義があります。言ってみれば、小共同体のプログラムはそのメンバー一人ひとりの中です。私たちがそれを各小共同体が取り出し易くする手助けをしているにすぎません。』

小共同体の精神を的確に表現した言葉として、心に深く響く言葉でした。

(中浜 敬司)



とがあるが、教会に関するかぎり、このことばはなじまないものである。このことばが発せられると、どうしても人間の思いが前面に出て、あれはだめ、これはだめということになる。教会の活動は、常にイエス・キリストへと帰っていく本来復帰運動なのである。

(2) 教会の本来の姿のイメージを大司教さまは「三つのことばで表現してくださった」「参加」「交わり」「宣教」である。

(3) この一年間、午前中に発表されたように、教区内において膨大な量の行事と事業が展開されてきた。ほんとうにお疲れさま。これらの活動の中でくり返された参加と交わりを、神さまはきつとり上げてくださり、世界の福音化つまり宣教としてくださったにちがいない。

(4) さて長崎教区の本来復帰運動はまだまだ緒に付いたばかりである。その中でまだまだ「点」の状態であるが、兆しが見えないこともない。

(5) ここに、日本の三つの大司教区の、過去二〇年間の統計がある。信徒数では東京が増えており、大阪が横ばい、長崎が年に千人近く減少となっている。特に成人洗礼は東京の約六分の一である。司祭数は長崎のみが伸びている。

(6) 長崎の成人洗礼数では71小教区のうち4つの小教区が、かろうじて二ケタになっている。二つは修道会系であり二つは教区の担当である。修道会担当のうち一つは、小さなグループながら呼びかけを行っている。教区担当の小教区で一人の司祭が三年間で四十数名の大人の洗礼に導いた例がある。それは単に「呼びかける」という普通の活動をした結果である。世界遺産や巡礼ブーム、列福式など連日のようにメディアにとり

上げられるようになってきているが、そのおかげで教会の敷居を低くするプラス面も出て来ていると考えてよいであろう。呼びかければ応えが返ってくる素地ができてくつあると言える。これらの間接宣教と直接洗礼を目指す直接宣教のバランスを考えるときが来ている。

(7) その他青年活動、宣教行動隊の組織など地区によって新たな活動が芽生えているが、まだ全体におよんではない。

②息の長い総合計画

(1) 教会の本来復帰のための活動が、教区全体に及ぶためには、一世代二世代かけた抜本的計画が必要である。

(2) 人は変わり時は移っていく。長い期間変わらぬ方向を貫くためには、土台としてのシステム、つまり組織が最低限必要となる。組織というあまり受けがよくないが、役割分担してしかもつながりを持って活動するための仕組みに他ならない。評議会組織は、さまざまな活動を一つに結ぶための、取りまとめ機関であり、活動推進のために霊的推進力を注入する集団としてコンベンツス(地区司祭のつどい)がある。この二つは人体にたとえるなら動脈と静脈とも言える

(3) これらのシステムに乗って展開する、具体的計画および方法として、いま世界的に評価されつつあるのがA S I P A (アシパ)プログラムである。小共同体づくり運動として知られるこの方法は、とかく外国ものとか、新しいもの好み衝動に過ぎないと言われることがある。しかし、外国のものであると、何であるかと、それがイエス・キリスト復帰にほんとうに寄与するかどうかと

いうことが、まず問われねばならない。聖書の分かち合いという、イエス・キリストに直接聞き入ることに基本をおくこの方法は、もつと評価されてよいと思う。

(4) その他、世界遺産、巡礼、カトリックセンターの一部ユースホステル化、さらには列福式など激動の年を迎えている。しかし、これらは直接洗礼を目指す宣教というより環境を整える間接宣教の手段でしかない

間接宣教は直接宣教があつてはじめて意義を持つてくる。

評議会は宣教・司牧評議会である。一小教区二ケタの成人洗礼などの具体的目標をかけた議論ができないものだろうか。列福式に向かうこの時ぜひ議題としてとりあげてほしい。

(二) 列福式について

列福式への教区の取り組みについて中村満師より説明

(1) 現在、2万人規模を想定して準備を進めている。

(2) 教区内の動員を一万人以上、スタッフの数七、八百人を想定

(3) 大司教より福者の信仰を求める祈り、前夜祭について説明があつた。

IV 閉会

最後に派遣のミサをもって総会を終了し、これからの一年への具体的取り組みを胸に散会した。